常盤問答

やづつのちやうもんせよ　釈迦仏と
まうしたていは浄飯王の御子　悉達太
子とせしが十九にて出家をとげ　檀
特山にとぢこもり　せんにんを師と
なり　菜つみ水くみ　たきゞとり　六年
きうじ　それより　ぜんじやうけんせ
しめし　二十五にて　正覚をなり　明星
出現とともに　まづ大小経を説給へ
て後より　ほうどう般若とて　十二年
ほうどう　般若を説給ひて　仏と
なりたまひし時　釈迦と申や。
三十のかくを悟り　華厳経をとき給ふ

三七日のあひだくわうせうにはよさ、
まことゝく。阿含経とかいは、指亥穢の
あのくたら。波羅内國鹿野園にて
せうほうとき給ふ。増一阿含、長阿含、雑
阿含、中阿含、此四阿含なり。此
おんきやうとよむなりせうじやうにてときたまふ
やいゞ三千年よりときたまふとはかつてき
阿含よりは一万六百巻、二百六十余阿含之。
紙数とさようは一万六百三十八丈字の
うちに六十億四千万字になるべし
此の中にも、女房、庭へはづかしくなる。
要文はかりなんぞとくよりありと妻

女房に嘆きの女人よりとぞいはれたりけれ
ときは、きゝたまひて、くげんをうけて申
のりふをひけるやぶらし、女人経の中に。
女を奥言ら経文あまたんじて高座をば
おりまいやうなりけるうちに女人あまた
くたりて、雪をけやせてあつまりて師
の御物かくたりて、かなしく申しけれども
申すなかにも、いづれも女人の一言
ごひやうも、経のせんをのべあつていはい
たりとも、おさまりもうさず、それぞれ
じきまようく、三よりいとしも男に
そうんで、儀をけくじら菩薩と

果なれは。ふしきとうとうんせうしやうの御経
ありのたにとんてんしけやうのごとく
ぐんぢうりきて菩薩もしやうしゆのせ
じき経をよみたてまつる。一切経の
うちは法華経をもつてほんとせらるの
法華経としいふはいつれもかゝれたり。
まことにては八万四千のほうもんすくなし。
六万九千三百八十四字はほとけなり。
妙経の筆をとつて妙法蓮華経とよ
むべし其外は筆をさしてよむところ文
字をあく。扇はかなめの女体は女しやう
じゆくこそ妙とはいふなれとよみ給ふ。

きいたらば。あれ三人の中にかけまくもかたじけなき
おりますす。やうやうたちあよとやれ釈迦
仏のけんよりたてまつりてはおもし
と此瞿曇やとのはうなんたちよ。五年の
わんけをうつしうはんにかけりて
くわせし。それかくのくらまうしく
萬やかたることまうしたるよしにかきり。
二あくはんの大唐の医王山。清涼山にいく
ゆまで。やと誦経せしとかしつの
ほとそのやはにもつけ経へきやうえ
つねぬ。けてのちちからえおはし。
さうかたし。はかりて東光寺の

脉よりおぼへくらくらう圓満とぞくそくらう。
らいせおゝらん事をいふしそうじやよ
いらせたもうとうふあゝそしかん事を
そうはしいぞうるかんとそむくらん
のかんとゝうけれいをちくはいりたく
ら髪をそり衣を黒染にそめくらんと。
くらたうとのうそくとふくそうらいぬ
うち給ども女もはやんあるべし。
法師となりたらば東光のでくよ修行ん
をうゝくいくつよはやんうきくんぞ。
ゝしやと是となりけてまいら給
給へぞくあゝらうことゝいてくおやのうち

さら間とて此いかやんいはとたゝく漬けるよ
なげきなすひとり老木は花のなき
ぐさしかへらんとして君が代のたとへ
かしや妻の縁よりしてこそ揚にくか
きこゑぶいたらもこゝにくてはくそてい
吾が所のないはてまいぬあやうきこの
ゆるまでごのも直にいひしよらのそと。
思ひの外にそむひもけれは梅にそ清
とらう引離しはかまでちぎりけれひとり。
三人のまうらは色。ゝくはうらとせ
とそ昨日の乳人とそへけも竹の海の
元るといくらりて籠雨なくしてたり

盤石のくだけてもいかでかさのみよらん
ともかくもあはれなりし天竺國も
あひだちかくてまで百済國。
あるはさらによしとしてあらしよろ
よのもかに國陽へわたりけれつき
それからさいの善光寺。牛舌の御
なくていまに乱人はいかなれはあし
らすともせず庭よせけいよるもさがひ
けりどもいふよのりけるおかの牛の
とやれいり大事の中にももとのへだい
三まへのゆきたくさまし人の日も行そ
ろ都はもとよりいきあてきは

こそりとも我が代のぼしても何国ぞあり
なんとか御せいさいせうら名しなじあらん
やげうさいまてとやい伊勢の
女院の御前本堂はそんはちひたる天。
福智恵といます人ぜんせい中のもの
のかんなかのまへの衆生とそやけり
ときいきおのされ其儀かくせん
へのりぞそらかれとやいかあり
なんと四書は雨つもれけい死くし。
うつとまへのものいやとぞ此
しかとれさやうんよ力もせよりそか
めりのかんそでなれたげてわはしの

下りられ。さけのめでのよまはせぜん
ともの人々には女房たち二三人。半下
の女二三人つれて。やどりをたちて行く。
川原をのぼりにまいりて。のちにかもれ寺社。
ぬかたの。七西八町坂をまゐつきに
ゑらぢもきんけん伏礼。堂まいりて
せさるひつぶ。かくれの内へ入りのひ礼盤
まむひらいて。高座にむかひあがる。
高座より下りける。啓白をしたもつて念誦。
さてありありがたしよ。鞍馬寺の
当人さて東光の本尊の日中のとり
かの其さはよ。礼すへきまいらせらかし

ぬ内をみるにて優なる女の高座に
ちや念誦がみてひみて東光
御らんぜしやうゆの能ばかりありて。なほ化
つかぬくきく他のゆいんれよりそて寺
をとりて其いふるに。高座の人の念誦
ありやさけりとて。ちんどもふせぬ
四月いりかけてとはらあげくげて
あるにてとよ兵衛。高座の人の念仏
かとられやけはなくてもいまげんれば
なりけるかひとりひとつ。女人ぞ
さりがけてて。きいちいちとめ
むかうかしんでや持戒持律の。高僧

貴僧なりてハ内陣のおくへハのぞむなり
いなかきりのをとこハ女ハ申すにおよばす
き男子の内たにも入らずましてや女ハ
いかにしてもまゐりて寺をおかむへき
まことにもあさましかりけるありさまなり
つねまうてよのつねのおもひにいかゝ
ひかりそへらるゝ女人の女房はた
ちやいそてのとそいかにおもひ。経巻
きゝしれわけへとよくよくおもひ
てまいてよろこひふかゝりけれ
ゝ色とそおほせけれハ。東山の女人
あさましくもけふとこそいはれ色

めでたけれとぞおもひしるへしとかくれ。
まことにこそまことのみちへと申しける。
六万九千三百八十余字にあまりくハしく
のべをのべおきて女人をたすけたまへる
なかなかきゝわけかたくいはれなくも
いのちをかけてこそ女人をもたすけたまふ
言語道断なるいはれをうけたまはりて
よろこひにたえぬとて涙をながしける
のぞみもかなひぬ。ひとへに御経に縁を
きゝまいらせしかのかけ証をとりける
仏の御としも七十二と申せし二月
の八日よりときをさだめて八年

のあのくたら霊山會の十品は序品
方ほんひゆほんしんげほん。薬草
喩品受記品化城喩品五百品じん
きほん法師品。虚空會は十一品は
寶塔ほんだいばほん勸持品あんらく
ぎやうほんゆじゆつほんによらい寿量品。
分別功徳品随喜功徳品ほつしく
どくほん。ぢやうふきやうぼさつほん
神力品ならびに霊山のあとへ。
七ほんとはせうひらう嘱累品やく
わうほんめう音ほんふもんほんだ
らにほん厳王ほんふげんほん是也

そうじて二十八品のうちは經五千余
くわんの中よりも女高座へあからおと。
あらたなりふしんにておぼしめし
別女の縁よりもこそゆるされ
東大膳をほどこさせ給ひて御たんがう
よまれけるがいかつつい寺にほうけうちやう
やしばしはやと思召御ちそうにて
これはおかつたんしがお経のうへよ三らう
三せんかいだいつてまさりけるがろ
ちかい一念はいけんいせん仏まつりとなりけれ
うちせんねんはいゆりゆの三千界の
男子のとうくわんなるところあるせいの

はかりにてぞ女人の業障はしとぞ。
されば地獄へおもむかし。女はおほきうちや。
女人をしまうさばいちぢやうふかく
さらに三世の諸仏は古を巻からんも
漢家をもとるのとこそきけ。とのく漢家をとるつ
めつよ天台山のかゞけんへおんなはまいらい
はらは醫王山摩靈山清涼山は
いらまでもゆるしてはらにもなりまずら
うきあきらや。山にも延暦寺高野山
長谷豆寺や猫麻寺。多武の峯へ
いらぬ内陣のかしらへのうちにとあり
されいろもかみそくてまいけらい

きらのほどみれば。いくらともなし。女と
生れぬるうへは、いつもはなれがたき
あひだの罪は晴ることもなくして、ふつとの
四のはかりまでもなきあれはくらきも
かさねていつかや女房をしてかぞ
まし候也。わがともおひてあきたのただかす
それなれば下賤のものよそにかけずしとぞ
いつかけるも業さまはかはれど嘘を
ひとつをものをとりていはんかたこそ
ときのさきけるまでおんなと読経。
悪しきいのちまではんずるにつのむか
しぬるがたからず。迷の毒よ男女はらう。

ほとけは男女のぜんごにしたがひ二つか
きりんのごとくにてまします。
あれはちきおろかにしてやせんとらうず
らせずまづみちびきにしや佛ハ母が腹
しまぜめぞ摩耶婦人の胎にやどりて。
報恩經とにんあるべきなれ天上にのぼり。
一夏がほどはかのをときおかせ給ふ
ぜらけ佛は背にはれぬひて。たまたま
からやし其身は三人のきさきおはし候
をば一を耶輸陀羅女二人の后とぞ
威儀とぞてもしたまふ人はあらせられずや
其三をば瞿陀弥とてすなはち容顔は

しか
りてではよ色ぐち忘念をはなれて。
そうづのおもひとは人の心のうち
念仏に於ては当麻寺はかくれなき
みなときいはるる人のごとくんば。そてられ
れるとうひ南に東光きこえし。吾寺
と申は光仁天皇の御代のせんだんの
ひゝぎはもとはなるほかにし観定房と
申しし聖徳をもって天台山にきてたまふ
すなはち小倉谷とかでとどかんちょく
のしおほちの院常料のはちかんにく
右大臣の御孫左大臣の女院の御
墓堂。ほぎんにちひたなとんでんあらく

ちゑとくふきんぞくやうぢ花葉さこうし
かしあらされとくいけてちきみぱしりんぞう
よけらあつるぞそれなどいりみをとかんいめを
いれうつ寺なりしじ女院の御うくとばなど
あれかんてておかしんぱ其上大ひだなん
ぞんやとそうてお行もぞ。三人の御事くは
吉祥天女ごぜとてたれきれげくあふけ
ふとかんたとそうていざごりのぎれいのふの
らんぞ。女院のみかうと吉祥天女ところとふ
御寺をいで、まへとよみかうし院へ。
西からぼ寺くともろんでおんらぢせんいう
しや。西からととて給ふされ

132X
28
36